

何をたええるか

山下 順子(5組)



一. わたしは?

ながく生きていると、思わぬこともあるものだ。昨年ボランティア登録していた小学校から「戦争体験を話してください」という依頼がきた。

太平洋戦争が終わってからの小学校入学の私に何が話せるか? ここはもっと年長の方がいいのではないか。でも、覚えている、あの理由もなくわかったサイレンの音、防空壕、低空飛行の恐怖。二人の兄たちが兵隊へ行った留守中の両親の不安感。戦後の不衛生さと食糧難。話したいことは山のようにある。そして、今まで本やテレビや知人から聞いた悲惨な出来事。

今でも、地球上のあちこちである戦争のために、人間もずたずたになっている。わが国では被害の話だけが大声で伝わってきていたが、おびただしい倍数で加害していたという事実があったらしいことなど。

二. 夏草

ベルリンの壁の話がきっかけで、二十歳のころから胸にたまっていたことが溢れ出て「私でよかったですら、話をさせてください」と返事した。

話を聞いてくれるのは小学三年生、九歳である。のんびりゆったり過ごしている私に急にエンジンがかかった。

低学年の学習は、まず自分に近いところから始まり、波紋のように周りへと移動していくので、範囲をしばって話そう。

まず十年余り通ったカルチャースクールの先生に会いに行った。おりおり人権を侵害する最大のことは、戦争であると言っておられ、私の軌道修正をいつもしてください。

身近なことそれは、戦争時の鹿児島市の様子を知りたい。「夏草」をもう一度読もう。

カルチャースクールで知り合ったMさんは、図書館で「ふるさと文学館五十三巻のなかの鹿児島市の空襲の様子「夏草」を読んで感銘を受けた。著者は前田純敬。芥川賞候補になっている。

Mさんは戦後生まれだが、見ず知らずの前田さんのこの作品を、もっと多くの人に読んでもらいたいと考え始めた。そのときから単行本が出来上がるまでを、私はおりにふれ、細かく側から眺めていた。(残念ながら、本が出来上がる二ヶ月まえに前田さんは亡くなった)

Mさんへ電話した。いろいろな数字をもとに教えてもらった。当時の鹿児島市の人口は約十七万人、死亡三千三百二十九人、負傷四千六百三十三人、行方不明三十五人など。

吉田、喜入、郡山などを最近合併したので大きな市になったが、当時は谷山でさえ市外だった。甲突川より南は、市街地を離れるほどに家屋敷のまわりには、田園や畑が見られるものだった。

三. 兄ふたり

私の断片的な記憶も記録しておこう。

六歳のわたしと次兄と、街に行くことになった。生まれて初めてのことで変な気持ちだった。

兄はミルクホールにつれていった。おいしくないミルクだった。脱脂粉乳だったのだろう。家も周りも貧乏があたりまえで、自給自足だったのでお金は見ることがないくらいだった。

兄はぼつりと言った。「どうせ死ぬんだからお金はいらぬ」このときの意味は数年経ってからわかった。六歳だった私が今でも覚えているということは兄の何かを感じていたのだろう。

次の日の朝、近くの日枝神社の広場で近隣の大人の前で、むずかしい言葉を使って挨拶できる兄がりっぱに見えた。次兄は気象の技術屋だった。

次に長兄が出征することになった。学生だったので遅れたのか、父はまた兄と霧島へ一泊旅行に行った。そしてまたお盆を記念に買って来た。もうそのころは派手な見送りはなかったと、のちに聞いた。

ある日、両親がいつになくいららしていた。長兄へ出した手紙が届かずに返ってきた。戦死だと覚悟しなければならぬようだった。

それから、家の庭に家族用の防空壕があるのに、父たちは崖を利用して大掛かりな防空壕を掘った。

通路用の壕の脇に一世帯に一つの壕もあり、私たち子どもは珍しかったので走り回って大人に叱られた。

一九四五年六月のある日の夜中に、街の方向が夕焼け色になっていた。大人たちは「やられた!」と語っていた。

そしてある朝、父は二センチ角くらいの金属の破



片を布団の上に見つけた。「焼夷弾の破片だ、そっとする」天井板をはずした屋根裏を見上げて言った。

そんなことがあって間もなく六月下旬、父は馬車をたのんで来た。家具は馬車で人は歩いて、住んでいた借家から三里北にある父の実家へ引越した。

四、十六人家族

台地にある家には井戸がない。二十分かけて谷の泉まで汲みに行く。洗濯も川ですることになった。

家の裏にまだ防空壕を掘った。電気が通じていなくて、明かりは菜種油を皿に入れて、コヨリを浸して灯をつけていた。

「敵が上陸してくるらしい」ということで、田の字造りの小さな我が家に従兄の家族が疎開してきた。始めにきた従兄は納屋の二階に住んでいたが、次にきた従兄の家族へは、寝室だった部屋を空けた。

そんなところに、以前住んでいた家の近所の家族がやってきた。私たち子どもは三畳間を横長に並んで寝た。

食料は、それぞれの家族が調達するルールだったらしく、従兄の家族は親類があちこちに居てなんとか食べているようだったが、元近所の家族は困ってしまったようだった。

「あそこなら何かあるかも」と親たちは、畑をたくさん持っている家まで幼い私に案内させた。売る食料はない、とその主人は言った。

「今日の食べ物もないので、どうかたのんもんで」と何時間もねばって、やっと裏庭へ案内された。いくつかのサツマイモを分けてもらった。本当に長いこと待つてやっと帰れた。

五、特技

すぐ隣の家の二人の息子が兵隊に行った。一人は戦死。その次の家も二人出征して一人戦死だった。

戦後、わが家の二人の兄は幸せなことに二人とも元気で帰ってきたが、大声で喜んだ記憶はない。近所のことをおもいやって密かに喜んでいたのでろう。

私には特技がある。直ぐに涙が出せるのだ。と言うか、涙が出てしまうことが二つある。そのうちの一つは「恵子」と言う名前を聞いたときである。

となりに住んでいた従姉は戦時中、となり村の青年で中国に働きに行く人と結婚した。それから二年くらい経っていたらどうか、その従姉が髪をばっさり切ってきた。

「あたいは男の洋服を着て帰ってきたとお。女の子が生まれたけど、恵子という名前だ。日本へ帰る途中ケ死んで、道端の土を掘って埋めてきたよ」あれから幾人もの恵子ちゃんに会ったけれど、一度も会えなかった恵子ちゃんがいとおしい。

六、植民地

夫は東京生まれ、韓国ソウルで育った。当時は中学生だった。

京城で暮らしていたある日の夜、九人の来客があった。明日は鹿児島知覧へ旅立つという兵隊さんたちだった。知覧へ行くということは特攻隊である。手に入りくいタバコと、夕食でもなした。隊のみんなを招待したのだが、個人の家から遠慮したのらうということだった。

夫は来客に色紙大の画用紙を出して、記念に何か描いてとたのんだ。大方の人は日の丸のマークの戦闘機を描いてくれた。高野さんの家族はハワイ、彼は日本の大学にきていたらしく、日本軍人として出征、兄弟で敵味方として戦わなければならなくなった。

九枚の色紙は戦後も大事に神棚に上げ、灯明をつけていた。父亡きあと、夫は色紙の裏に書いてあった彼らの本籍地へとお返しした。数人の遺族からお礼の便りがあり、届かなかったものは、特攻記念館へ預けた。平和のために使っていたきたいと願いつつ。



七、シベリア抑留

話をするようになった小学校に私は、たまたま勤務していたことがあった。当時同僚だった宮元さんは、趣味の会でも何年もの間一緒だったので、彼が抑留されていた当時の作品をいくつも読んでいた。

宮元さんはアコーディオンをひきながらよく歌を歌っていた。シベリアでもおりにふれ、歌ったり俳句を詠んだりして気をまぎらわしていたそうだ。作品は苦しい生活の中のほのぼのとしたエピソードが多かったが、行間は極寒のシベリア抑留生活の悲惨さが伺えるものだった。

学校では、朝の駆け足も驚くほどの距離を走っていたので、きつと苦いころから体力のある人だったから、生き残ることができたのらうと思った。

私は、話の中に宮元さんの体験談も入れたいのでタイトルは、「私と周りの人たちの戦争体験」とし、「みなさんの未来が幸せであるために、過去の不幸体験をお話ししますー」

と、スタートの言葉を用意した。

後日もらった児童の感想文のなかに（戦争で生き残った人が、外国ではたらかせられるなんて、とてもひどいし、家族の皆は、とても悲しむなあと思いました）というものがあつた。

私は（あのね、外国へつれていって働かせてもいいよって許可した人がいるのよ）と言いたいが、まだ言っていない。

八、絵本の力

私は読み聞かせや、語り聞かせを〇歳から九十歳くらいまでの人々にしてきた。することに、絵本の力の大きいことに驚いている。

その成果のほとんどは、選書にある。聞いてくれる人に合う本を選ぶのに特効薬はない。常にアンテナをはっておくこと、数をこなすことだと思っている。

児童への話のおわりに絵本を二冊紹介した。読み聞かせと語り聞かせの要領で、絵を見せながら内容をかいつまんで話した。

「すずかけどおり三丁目」

（ぼくの頭に残っているのは、二冊とも悲しかったけど、一冊目が一番悲しかったです。戦争はあつたらいけないんだな。ぼくたちが想像している以上にこわいかもしれないかも。体験したらふるふるほどこわいなと思いました）

「おこりじぞつ」

（ぼくはいいちゃんから、戦争の話をよく聞いていました。きょうは、原子爆弾のせいで、人の体の皮膚をぼろぼろにしていたこと聞きました。こんどは戦争についての本をかりてこようと思いましたが）

生まれてから九年しか生きていない子ども、吸収する力と感性に驚かされた。（わたしはおばあちゃんから話を聞くけど、こんなにくわしく聞いたのは初めてでした。聞きおわたつたあと、とてもぶくぶくでせつない気持ちでいっぱいでした。でも、聞くまえも聞いたあと、ぎもんに思うことがありました。それはなぜせんそうをしたかです）

（私は五十年間くらい考えてみて、解つたこともあるけれど、解らない事もたくさんあるのよ。いろんな本をたくさん読んだり、話を聞いたりして、その疑問を解い



ていってください。わたしの尊敬する先輩は「よい戦争というのはひとつもない」といっておられました」と、子どもたちに伝えたい。

“私の願いは、みなさんの心と体が戦争のために傷つかないように、命が守られるように祈っています”と結んだ。

おわりに、選書の秘策を独り占めしないで、「散らす」ことにします。自分と同じ考え方の友達、尊敬する先輩をもつ。その方々の膨大な読書の中から教えていただくとすばらしい本が飛び出てきます。そんな関係をつくっておくことも大事なことです。

九、ごめんね

喧嘩両成敗という方法は、妙に納得するやり方だが、その場しのぎのごまかしである。

原因追求するには、永い時と知性が必要だろう。十五年に及んだ戦争では、五分どころか何十倍？ もの加害者となったと聞いたり、読んだりした。

私の知人は、自分が直接加害したわけではないが、被害者の国を訪れたり、人々と会ったときは、謝罪するように心がけているそうだ。これから成長していく子供達にも冷静に謝罪できる知性をもってほしいものだ。

同人誌「流域」より

八期通信アーカイブス

2007年 第13号
鮫島 康孝（2組）



教職というと、傍目には狭い世界での単調な生活に見えるかもしれないが、仕事相手が若くて、元気で、多感な高校生であり、感受性豊かな生きている人間である故、面白く、やりがいのある仕事であった。

公立学校教職員は転勤が免れない。この間、鹿児島県下の七つの地域で、八回の転勤生活をしてきた。所変われば、品変わるで、狭い県内でも子供や親の考え方や人間性が土地によって異なる。人情味豊かで穏やかな所もあれば、口やかましく、口数多い所、プライドが高く、ガンとして譲らない所、等々、地域性がある面白い。しかし、住めば都とはよく言ったもので、すぐその土地に慣れてしまうものである。同様に、ハケ所の職場での同僚の中に、自分とは全く違うユニークな人物にも何人か出会った。（略）

その中で十二年前に教えを受けた「刻字」について、当時のメモを参考にしながら紹介してみようと思う。

そもそも書とは、意思伝達のために言語を文字として書きつけることから始まり、刻字は、書かれた文字を未来へ伝達するための保存から始まったと言われている。

私達の中には子供の頃、教室の机に名前や数字などを刻り込んだ経験のある人や、そのような物を見たことのある人もいると思う。あれがまさに「刻字」である。他人に見つからないようにと、こっそりと自分の労作を後に残そうとするあの行為は、人間の記録するという、一種の自己顕示欲の現れなのかもしれない。